

震災から蘇る

理工学部長 丸岡 章

国難ともいべき大災害からの復興には長い年月が必要となる。

この地域唯一の大学として、大学本来の役割を果たし続けることこそが、地域の復興を後押しするということ忘れてはならない。

理工学部

千年に一度とも言われる3.11大震災からすでに10か月が過ぎたが、この震災が大学と地域に残した爪痕は今なお深い。この国難ともいべき大災害から復興し、地域が震災前の状態に戻るためには、10年以上の年月が必要となると思われる。地域の大学を自認する石巻専修大学はこれから長い期間にわたり、この状況から多大の影響を受け続けることとなる。本学が将来にわたり健全な大学として存続し続けることを願い、震災後のこれまでとこれからに思いを巡らせてみたい。

大学は学事暦にしたがって運営される。毎年の学事暦に大きな違いは無く、昨年度行ったことを思い起こすと、ほとんどの場合、今年の何月に何をすることが自ずと決まってくる。しかし、今年度はこのようなやり方は通用しなかった。震災のために緊急に対応しなければならないことが多かったからである。

震災直後、大学は混乱を極めた。自家発電による大学の灯に助けを求める近隣の人々が次々と集まって来て、ごく当然のこととして大学に受け入れられた。震災当日の夜の見回りでは、大学の敷地と北上川を隔てる土手の水位の異様な高さに言い知れぬ恐怖を感じた。鈴木均前理工学部長は震災後の緊急対応について様々の指示を出した。安全と実験設備の保全のため、理工学部の実験室のある建物はロックアウトされた。山崎省一前学生部長は、学生が新学期からの学生生活

をスタートする上で必要となる環境を整えるため、さまざまな調査と検討を行った。遠方から通勤している教職員は大学に残り、さまざまな面でサポートしてくれ、心強かった。今野健吾常務理事と山本静前事務部長は、東京滞在中の坂田隆学長と連絡を取りながら、学生や市民の大勢の避難者を適切に誘導し、ボランティアを始めとして、様々の復旧活動をする学外のグループに大学のスペースを提供した。そして、事務部を中心とした大学の中核の機能を復帰させることを最優先にして対応し、驚異的なスピードでこれを成し遂げた。この間の事務部の若い職員の献身的な働きには目を見張るものがあった。構内に残った学生は、被災者の立場でありながら、被災した市民のサポートなど、いろいろと働いてくれた。

さらに、ガソリンスタンドの閉鎖で身動きのとれない仙台在住の教員は伊藤宣生教授の自宅事務所に集まり第1次の学生の安否確認を行った。平成23年5月22日、入学式がほぼ2か月遅れで举行され、新学期は始まった。また、6月19日、7人(入学予定者1人を含む)の若くして亡くなった学生の尊い命を弔う東日本大震災合同追悼式が日高義博理事長の出席のもと举行された。この合同追悼式に出席できなかったご尊父を大船渡市の勤務先にお訪ねし、ご子息を失った深い悲しみに触れた。また、震災後の大学の対応について保護者

に説明するために、各地で臨時の育友会が開催された。

2か月近くにも及ぶ休校期間中、学生とどのようにコンタクトをとり、どのように指導するかは難しい問題であった。通信手段の確保が難しく、また、学生の被災の程度に大きな違いがあったからである。そこでまず、第2次の本格的な調査のため、実家やアパートそれに家族の被災の状況から、休校期間中の大学に対する要望まで、25項目にも及ぶ調査項目のリストをつくり、学科主任に依頼して手分けして学生1人ひとりの聞き取り調査を電話で実施してもらった。この調査を経営学部でも実施してもらい、両学部のデータを集計し、さまざまな学生指導や支援に役立てた。事務部で郵送により実施した学生アンケートに加えて、学生支援係でもこのデータは役立てられた。この電話による聞き取り調査では、学生に話し込まれ、つい長電話になるということを、私だけでなく、多くの教員が経験している。また、休校期間中の課題を始めとする学業指導については、相良勝利経営学部長と綾皓二郎全学教務委員長とも相談して実施案を取りまとめた。さらに、被災支援スカラシップ入学試験で入学する学生を対象とした、個別指導の実施案を取りまとめた。

これまで述べてきたことは、今回の震災で被災した大学であれば実施するであろう言わば応急の仕事である。実際、これらの仕事には震災からの早急な復興を目指すという高い意識を持って臨んできた。しかし、これからの長期間にわたる復興の活動は、周辺の地域の復旧を待ちながらの困難なものとなる。その道筋に思いを馳せるとき、わたし達が、卒業後の学生の長い一生を案じ、常日頃激励するときに用いる数々の言葉が浮かんでくる。「問題発見」、「問題解決」、「コミュニケーションの能力を鍛えよ」という言葉である。今回の震災は、この言葉をわたし達自身に突きつけてくる。問題を発見するためには、大学の中だけに視点を閉じ込めるのではなく、地域は

この大学をほんとうのところはどのように見て、何を期待しているのかを探るところから始めなければならない。問題が発見できたら、それを解決する方策を探し、実行しなければならない。そのためにはお互いの思いや考えの共通理解が必要不可欠となる。そして、何よりも、大学の構成員が震災の困難に立ち向かうことをチャレンジとして前向きに捉えているかが、鍵となる。そして、震災当日の^{ともしび}灯のように、この地域唯一の大学として、大学本来の役割を果たし続けることこそが、地域の復興を後押しするということを忘れてはならない。今回の震災により、わたし達はこのような極めて当たり前のことを再認識させられた。

1 その時、大学は

2 大学の被災状況

3 地震直後からの大学の対応

4 地域社会への貢献

5 各学部・委員会などの対応・動向

6 建物と地盤について

7 震災を振り返って

資料編